

TS（トータル・サティスファクション）を目指して②

「授業規律が乱れる本当の理由」

校長室担当より

ある高等学校で私が2年生の担任を持っていた時のことです。自分が担任を務めるクラスで、ある先生の授業だけ授業が成り立たない事態になっていました。担任として、当時の校長先生と相談し、私は自分の授業を一時間つぶして、クラスの生徒たちと話をしました。すると、彼らが訴えてきたのは、次のような内容のものでした。担当の先生は「機嫌が悪くなると声が大きくなってくる」「注意する時にいつも皮肉を言う」「自分のミスを絶対に謝ってくれない」等々。結局彼らの主訴は、「人として尊敬できない」という言葉に集約されていました。この先生は、この2年後教員を辞職されました。同僚としての私自身の力不足でもあったと今でも感じています。

ビジネスコンサルタント業を皮切りに、全国の地方自治体等で「人材育成」を主テーマに約7,500回、のべにして30万人以上に研修、講演を行っておられる福島正伸さんは、学校関係者対象の講演でこう話しておられます。

「なぜ先生のいうことを聞かないの?」と生徒に訊くと、『だって先生のいうことを聞くと、先生みたいになっちゃうもん。』と答えます。子どもたちが教師の言うことを聞かないとしたら、それは、子どもたちがその教師のような大人になりたくないからです。まずは私たち教師が子どもたちから『あんな大人になりたい』というモデルになる必要があります。先生の普段の発言や行動を見て、この先生の言うことは聞こう、あの先生のいうことは聞かないと子どもながらに判断しているのです。」

また、全国屈指の強豪校である熊本県立大津高等学校サッカー部総監督で、自ら宇城市教育長も兼務される、平岡和徳さんもその著書の中で次のように語っておられます。

「子どもたちが有能なのは、我々の本気度を一瞬で見抜くところ。「あの先生のいうことなら」という目に見えないオーラを感じてこそ子どもたちは動く。子どもたちが言うことを聞かないのは、人間としての我々の力が不足しているからである。この力とは、強制する力ではない。大人の目には見えないが、ふとした行動で顔をだすもの。子どもたちにはそれを感じ取る力がある。」

子どもたちは大人の姿を見て育ちます。私たち大人のちょっとした行動で、「この人は・・・」と見抜きます。特別支援学校での経験を通じて、子どもたちの持つこの力はとてつもなく大きいということを、私は身に染みて感じてきました。

授業の工夫がないことは授業規律が乱れるきっかけにはなり得ますが、本当の理由は「技量不足」ではなく「人間力不足」。私はそう考えています。授業規律という名のもとに、過度の努力や我慢を強制することは、子どもたちの本当の姿を見失うことにつながります。厳しい叱責、気持ちを傷つける皮肉等で押さえつけ、彼らの自己肯定感を傷つける必要は全くありません。私たち教員は、子どもたちの思いに寄り添いながら、人間としてあるべき姿、理想の言動を示し続けることが求められています。ただ完璧な人間はいません。私もそうですが、時には自身の感情に敗れそうになることもあると思います。それでも、そんな弱い自分としっかり向き合う姿も含めて、人間としてのお手本を子どもたちに提示していきましょう、一緒に。(令和6年4月26日)

4月1日に、先生方へお願いしたこと

- 1 人間の生き方のモデルを姿で示していただく
- 2 トータル・サティスファクションの実現
- 3 対話とパートナーシップに基づく行動
- 4 全教職員で全校生徒を見守るチームへ